

うえすとさいど

ともに成長を目指す「組織キャンプ」への誘い 多様なニーズに対応 NPO 法人「キャンピズ」

この夏、海や高原でキャンプを楽しまれた方も多いでしょう。家族や友人と野外でバーベキュー、それを SNS にアップして「楽しかった思い出」を共有…というのが令和の楽しみ方かもしれません。私が子どものころに経験した昭和のキャンプは、野外活動センターなどに行き、自然の中で様々な体験をし、大勢の仲間とキャンプファイアを囲んで楽しむ「組織キャンプ」といわれるものでした。大学生たちがいろんなプログラムを用意して、子どもたちに野外のルールを伝え、活動をフォローしてくれました。そのカッコいい姿にあこがれ、私も学生時代はキャンプリーダーとして活動したことも。キャンプの運営なども経験し、自分が成長するうえで大きな影響を受けました。そんな「ともに成長するキャンプ」を令和の時代になっても大切に続けているのが、特定非営利活動法人 (NPO) 「キャンピズ」（大阪市中央区谷町）です。当法人の児童通所事業「そだちの家まちかど」の活動にも応用できないかと、和歌山県白浜で開催されたキャンプを訪ね、代表理事の水流寛二（つる・かんじ）さんと事務局長の梅田純平（うめだ・じゅんぺい）さんにお話を伺いました。（前川 敦）

■和歌山白崎のんびりキャンプ

「組織キャンプ」という聞きなれない言葉が出てきました。「日本キャンプ協会」によると、『ある目的を達成するために十分に準備され、計画されたプログラムのもとで、野外でのグループ活動や共同生活を通じて、参加者に楽しく創造的でかつ教育的な体験の機会や場を提供する。また、身体的、精神的、社会的成长に寄与するための指導者と自然環境資源が用意される』などとあります。

「キャンピズ」主催で、和歌山県由良町にある白崎青少年の家で開かれた「和歌山白崎のんびりキャンプ（8/19～22）」も、そんな「組織キャンプ」です。私も「そだちの家」の子ども3人とスタッフ3人と一緒に「1日体験」してきました。キ



白崎のんびりキャンプのひとコマ

キャンプには障害のある方も8人参加し、水流代表とボランティア学生4人で運営されていました。この日は飯ごう下さいさんでカレーライスをつくるというプログラムでしたが、私たちの到着時にはすでにカレーはできあがっていて、みなさんはそれを食べずに待っていました。美味しくいただいたあと、ボランティアが中心になって後片付けがはじまります。片づけを手伝う人もいましたが、そうでない人もいて、「義務」とか「強制」とかではなく、参加の仕方もさまざま。「そだちの家」の子どもは、できることを手伝って片づけを手早く済ませると、水流代表のギター演奏会場へ。ギターに合わせて歌ったり、互いに自己紹介をしたりと、「のんびり」した1日をすごして夕刻に帰路につきました。白崎海岸の海と山は本当にきれいでした。

■キャンピズは大阪市のボランティア養成講座から誕生

キャンピズは1998年に桃山学院大学の石田易司（いしだ・やすのり）教授（当時）が開講したボランティア養成講座が原点といいます。受講生たちが「話を聞くだけでなく、この内容を実践しよう」と呼びかけ、「CAMP WITH」というグループとして発足。大阪市立信太山青少年野外活

動センターを本拠地にしてさまざまなキャンプの実践を続け、2002年にNPO法人「キャンピズ」として法人化しました。四季を問わず、参加者も子ども、障害のある方、認知症の高齢者など多様なニーズに対応しながら、いろんな場所で、年間30本以上のキャンプを運営し、活動はどんどんと広がってきました。2008年の10周年のころには、

キャンプを運営するキャンピズメイト、キャンプに参加を希望するキャンピズクラブをあわせて会員300人を超える団体に成長しました。

（2面につづく）

コロナの打撃からの立ち直り そして新たな活動へ

■学生主体の運営

順調だったキャンプ活動も、2010年代に入るとアウトドアレジャーも多彩となつたうえ、公的な野外活動施設の老朽化して閉鎖が相次いだことから、新たな組織づくりと活動の見直しを迫られました。そこで従来のボランタリーな運営から専従職員制に切り替え、2017年には障害者支援事業「ウィズ芦屋」を開設するなどで経営基盤を強化しました。

キャンピズの特徴は、開設以来ともいえる「学生ボランティア主体によるキャンプ運営」です。学生自身が中心となり参加者にあわせたプログラムを作り、そのプログラムや技術を「ともに活動するキャンプ」を通じて先輩から後輩へ伝えていくというスタイルです。

学生は、最初に先輩や友人に声をかけられての受動的な参加からはじまり、毎年恒例の10泊11日キャンプなどで経験を積んでいきます。上級生になるとプログラムディレクター(PD)・マネジメントディレクター(MD)としてキャンプ全体をマネジメントする立場になっていきます。そこには、目の前の参加者とうまく関係をとるところから、プログラム運営や野外活動の技術を身につけ、キャンプ全体を取り仕切るための幅広い視点や、活動事務管理の視点などを学生が自然に身に着け成長していくプロセスがあります。

キャンプに参加するのは障害のある方・子どもなど様々ですが、学生も参加者も対等な関係で、みんなでキャンプを作り上げるスタイルです。誰から強制されるわけでもなく、ボランティアとして学生自身が「やりたいからやる」ことを基盤にしています。梅田事務局長はかつてキャンプリーダーとして活動した学生だったそうで、「最初は友だちがたくさんできればいいくらいの軽い気持ちで始まったボランティアから、働きながらキャンピズに身を置き、その後は事務局長まで務めている」そうです。最近の学生について、「個別化がすすみ、SNSを最大限利用してお互いに配慮しながら関係を深めていくスタイルは自分たちの頃と違いはあるけれど、誰かと知り合いたい、人とつながりたいという気持ちは今の学生も変わらない」と話されました。

そしてキャンピズは学生たちの「成長の場」としての役割を果たし、多くの学生が社会人としてキャンピズから旅立ってきました。もちろん、初代代表の石田元教授や現任の水流代表たちの公私にわたるバックアップがそれを支えていました。

■コロナの猛威と活動再開への課題

こうして長期にわたって学生による主体的な

活動を続けてきたキャンピズですが、大きな危機がやってきました。2020年から猛威をふるつたコロナウィルスによる感染症の蔓延です。キャンプは2020年2月からすべて休止に追い込まれ、2023年によく宿泊キャンプを再開することができたものの、このブランクの影響は大きく、学生のほとんどが卒業し引き継がれてきた活動のプロセスが途切れてしまいました。

「白崎のんびりキャンプ」も、学生が集まらないため定員6人で募集したのですが、多くの参加希望が集まり定員をなんとか8人に増やして開催したとのことでした。「誰からも強制されることなく、学生同士の『楽しいから一緒にキャンプにいこう!』という口コミをもとに続けられてきた活動を再開することは並大抵ではない」と水流代表は話します。

水流代表自身が非常勤講師として勤務する大学をはじめ、他の大学も含めて広くボランティアを募集しているそうです。みんなでともに生活を作り上げるキャンプに参加したいという方は、ぜひご協力ください。

■そだちの家まちかどとの協働

「そだちの家まちかど」の目標には

「子どももスタッフとともに育つ」ことを掲げています。キャンピズが20年以上かけて実践してきたことは、そだちの家まちかどの運営にとても参考になりました。この5月には、水流代表と学生ボランティアをお招きし、法人研修としてスタッフ参加のキャンプを行いました。楽しい雰囲気の中で、みんな一緒に活動することでそれが成長していく~そんな空間をつくるため、たくさんのこと学ぶことができました。近い将来に開催したいと考えている「そだちキャンプ」への協力もお願いしています。社会が「個人を大切」にという流れの中で失われつつある、グループで学びあい楽しめるという「古くて新しい」環境を構築していくことを目標に、これからもお互いに協働し歩んでいきたいと思いました。



キャンピズの水流代表（左）と梅田事務局長



ボランティア希望の連絡は、
右のキャンピズのHPから

昭和印刷



「不可解な万引き」のAさん亡くなる 東大阪で社会復帰 手に入れた平穏の日々



6月のある日の夕方、「Aさんが部屋で倒れている状態でみつかりました。心肺停止です」と連絡がありました。すぐに救急搬送をされましたがその日の夜、死亡されました。

Aさんは『うえすとさいど』第37号、第39号で特集をした幼いころの虐待やその後の過酷な生活が原因で解離性障害を発症、「意識がないままに不可解な万引きをくりかえしてしまう」男性です。第39号を発行した2021年4月以降、最高裁判所まで争いましたが、一審での判決を覆すことはできず、彼は実刑となりました。初夏の朝、私たちはAさんにせめてもの気持ちから「必ず待っているから」と伝え、Aさんはひとり刑務所へと収監されていきました。一人暮らしをしていたAさんの家具や荷物のある事業所の好意で預かっていただき、私たちは彼の出所を待ちました。

しかし、親族ではない私たちは刑務所での面会がかないません。字の読めないAさんに手紙を書いても、刑務官が彼に読み聞かせてくれたとしても返事は期待できません。私たちにとって、もどかしい日々が続きました。唯一の頼りとして、障害のある方の出所支援をしている地域生活定着支援センター「よりそいネットおおさか」に声をかけ、Aさんの出所の相談があった場合はふせまちかど相談所に支援依頼をしてほしいと連絡していました。1年が過ぎようとした頃に、待望の連絡が。久々に会うAさんの姿は、収監の頃に比べてかなりやせしていましたが、「適正な食事と生活で健康になった」と笑って話していました。一方で、情報がないままに本当に元の生活に戻れるのか不安だったそうです。

刑期を終え、出所されたAさん。施設でしばらく生活することになり、その間に次の生活の場所について相談をしました。最初は一人暮らしを希望されましたが、身寄りがなく、高齢になるとひとり暮らしの賃貸契約は高いハードルでした。相談の結果、障害者のグループホームへの入居を決めました。以前に、グループホームでは他の入居者との共同生活にストレスを感じていたので心配をしていましたが、今回はプライベート空間の確保されたワンルームタイプでの生活だったので、Aさんも「一人暮らしみたいなもん。食事は出してくれるし、楽」と笑って話しておられました。ホームから以前に通所をされていた作業所への通所も再開されました。

Aさんは仕事も順調、成年後見制度の保佐人も就任し、今度こそ安心して生活できる環境が整いました。

東大阪市に戻られてから、以前のように意識がとび記憶が

なくなる場面もありましたが「不安を感じたらすぐにホームの人や作業所の職員に話せるから安心している」と話をしてくれました。いつ行ってもきれいに整頓されたお部屋、楽しそうに日々のことを話してくれる様子に、ようやく安寧の生活を手に入れられたのだと感じていました。

その矢先の突然死。その日は作業所の活動で、外食をされたそうで「こんなにおいしいごはんは初めて」と話していました。夕方に自室に戻られた後、夕食までの間のほんのひと時の間にAさんは天国へと旅立たれました。

Aさんと出会ってちょうど10年。両親に育ててもらはず、知的障害があることには気づかないまま職を転々とし、その日暮らしの日々。知らない間に犯罪を手伝わされて実刑判決。出所支援でようやく福祉の手が届きました。福祉サービスを利用しての生活にもストレスを感じ、解離性障害の症状が悪化、意識せず万引きをしてしまうため再び実刑。本来のAさんの障害をようやく周囲も理解することができ、やっと手に入れた安心した環境での生活でした。最後にAさんが食べた食事が慣れ親しんだ作業所の人たちとのおいしい食事であったことが私にとっては大きな救いとなりました。

Aさんの人生が幸せだったか、その答えはわかりません。ただその人生を通じて、福祉がなぜ必要か、何をしなければならないかを私たちに示していただきました。

安らかに。

(西田 奈津子)



イベント情報

◆アミューフェスハロウィン

日時：10月26日（土）12:00～

場所：大蓮東公園（雨天決行）（大蓮東3丁目6-28）

ハロウィン仮想コンテスト、妖怪スタンプラリー、フラダンスなどの催し物あり。焼き鳥、ドーナツなどの軽食販売も。入場無料、入退場自由、事前申し込みは不要です。

ぜひ仮装してお越しくださいね！

お問い合わせ：06-7503-6897（一般社団法人アミュー）

◆社会福祉法人ポポロの会

法人設立20周年記念イベント

日時：11月30日（土）10:00～12:30

場所：八尾プリズムホール 5階レセプションホール

（八尾市光町2丁目40番 八尾文化会館）

当日は北野誠一先生と新崎国広先生の記念講演を予定しております。入場無料、事前申し込みは不要です。

お問い合わせ：072-940-3321

（社会福祉法人ポポロの会）

ふせ支援ネットワーク賛助会員

東大阪店舗管理センター
カットハウスAmi
昭和印刷出版株式会社

Craftbeer Tavern
一般社団法人アミュー
アトリエからふる



そだちの家まちかどを卒業してから

～それぞれの活躍を尋ねて～

今回は番外編と題して、そだちの家まちかどで働いてくれていたアルバイトの皆さんのインタビューをしました。懐かしい顔ぶれがいっぱいです。

- ① 今の仕事について教えてください。
- ② そだちの家まちかどの経験が役に立ったことはありますか？
- ③ そだちの家まちかどの思い出を教えてください。

みんなが笑顔で過ごせますように★



- ① 私はインテリアの接客業です。お客様からのご相談を受けて、家具を案内して、より買いやすい売り場になるように、売り場の変更をしています。
- ② 接客業をしているとたくさんの方と接するので、話の聞き方や情報を聞き出す力などは、そだちの家まちかどの経験がとても活きているなと感じます。
- ③ 子どもたちに教えてもらいながら、ゲームしたり、本気で鬼ごっこしたり、YouTube を教えてもらったりしたのも思い出に残っていて、今でもたまにしまじろうとか見ちゃいます（笑）

宗澤佐都美さん
(さとみん)

- ① 児童養護施設で勤務をしています。子どもたちを生活の場で見守りながら、地域社会に出る準備が出来るように支援する仕事をしています。
- ② そだちの家まちかどで何をするにも「なぜ」というのを意識するようになりましたね。子どもや自分の言動に疑問符を持つことで他の職員にも共有事項の発信がやりやすくなりました。子どもたちに寄り添い、前後関係を知ることで、支援に繋げていけると思います。
- ③ ポケモンカードですね。当時小学4年生の児童と一緒にした事で、今でも色んな児童と関わるきっかけに、ポケモンカードはなっています。

四方拓海さん
(しか)

ポケカ
強くなったよ!!



- ① 地域包括支援センターで働いています。地域の総合窓口として、介護保険の申請など必要なサービスの提供を行っています。また地域団体と関係性を築くことで、地域行事のお手伝いもしています。
- ② 現在は主に高齢の方を対象とした相談をしていますが、そだちの家まちかどで子どもたちと直接むきあつた経験があったから利用者のニーズ把握や先輩職員との情報共有や支援について考察できるようになったと思います。
- ③ 色々あり過ぎて選べないです（笑）ただ、どんな声掛けをするのが良かったのかなって、いつも考えていましたね。

澤田凌太朗さん
(だわさ)

鬼ごっこで
タッチしに
行くで!!

- ① 「そだち」と同じ放課後等デイサービスで仕事をしています。本人らしく過ごしてもらえるような環境作りや支援計画に沿った対応をしています。
- ② 子どもたちと一緒に過ごす事で大人（職員）も「そだつ」という考えが、そだちの家まちかどに入職した当初の私にはなかったので、たくさんの事を経験する中で多くの事を学びました。また、子どもたちの言動一つ一つの意味や背景を考察することで、子どもたちとの関係性を深めることも出来ました。その中で職員同士のコミュニケーションも取りやすく、私自身も「そだつ」事が出来たのではないかと思います。
- ③ 毎日があつという間で思い出すのが、難しいというのが率直な気持ちです。ただ、その日の終わりに子どもたちが「楽しかった」と言ってくれた時は凄く安心しました。

安留航さん
(あん)

たくさん
新しい経験してね!!



堀江亮太さん
(りょーた)

- ① 児童養護施設で勤務をしています。子どもたちの健やかな成長、自立のために、家事全般をはじめとして、学習支援や家庭環境の調整などを行っています。
- ② 施設行事の中で子どもがやりたいと言った事を、実践する機会がありました。結果はうまくいきませんでしたが、最後まで責任をもって子どもに応えることは、今の環境でも欠かせない事だと感じています。
- ③ 初めて子どもたちと関わることが出来た場所でした。様々な個性を持った子どもたちとの関わりは新鮮で驚く事ばかり。時には悩むこともありましたがどれもいい思い出です。

